

## 一番好きなもの

ぎふ国際高校 3年

「あのだ」

「なに？」

「俺、たくあんが一番好き」

「うん、そっか」

\*  
\*

いつからか、鳴海のお弁当を作っていた。同期入社。ただそれだけの接点だったのに、今では鳴海の味覚を考えながら、毎朝からつぼの箱に食べ物を詰めている。「お願い！」の四文字だけで私を突き動かした鳴海は何者なのか、まだ分からない。

卵の殻が白身に飲み込まれていくあの瞬間。

人生にあつてもなくても変わらないのに、必ず存在する小さなストレス。紙で手を切るとかコロコロの切れ目が見つからないとか。

卵にはそんなストレスがぎゅつと詰まっついて、二個以上割ると指先は冷えるし、その指に殻は刺さってくるし。私の嫌悪感が卵に伝わっているのか、初めて触ったときから相性がすごく悪く。

それを取り越えて毎日作っている卵焼きよりも、蓋を開け、つまみあげ、ノールックで切り刻んでご飯の上に乗っけただけの着色料大根が一番好きだと言われた、今。不意すぎる会心の一撃にすつと目線が下がる。たかがこんなことで。なんでこんなことで。四捨五入したら三十路なのに。どうか、どうか気付かれていますように。

ちらつと目線を上げると、今日も目の前でスーツ男が黄色いご飯を幸せそうに頬張っている。ポリポリ。ポリポリ。私が一番落ち着く音。そして今、一番不安になる音だ。

\*  
\*

やつてしまったかもしれない。

「漬物の中で」たくあんが一番好き」って口に出したつもりだった。なのに、多分、すっぱ抜けた。さらに樋口はどうやら、「弁当の中で」と受け取ったっぽい。

すぐに言い直そうと思ったけど、樋口の身に纏っている空気が変わった気が。前に冷凍食品らしきおかずを褒めたら、こんな感じになった覚えがある。あ、言ってるそばから俯いた。これが俗に言う嵐の前の静けさか？ ……こんなことで？ ……なんて言ったらシンプルに怒られるかな。相変わらず考えることは性分に合わない。

俺は食べるのが好きだ。ついでに、他人の食事にも興味がある。

ベンチでぼつんと弁当を食べていた同期入社の子。他人が食べているものを覗く癖は、社会人になっても治らなかった。いつものようにターゲットの背後を通りすぎるだけ。そつと弁当を覗きこんだ。

——美しい。美術の教科書を見てもさっぱりだった俺の感性が、確かにそう反応した。パツと見ただけで心を奪われる弁当は、この世にいくつも存在するわけじゃない。

脳で考えるより声が出た。そして今、目の前に樋口がいる。

\*  
\*  
\*

背後から声をかけられた瞬間、逃げ出そうと思った。でも、私の作ったお弁当に対して早口で感想を言ってくる鳴海の声を、ずっと聴いていたいとも思えた。誰かに褒められることの嬉しさを、久しぶりに体感できたから。きつかけは覚えているのに、いつからかは覚えていない。それでも、「これ、うまいな〜！」と言いながら食べる鳴海の声と表情は、もう実家よりも身近だ。

作っていると言っても、全てが手作りではない。手作り七割、冷凍食品三割のバランス。このことは鳴海に暴露されるのが悔しくて秘密にしている。でも、鳴海は隔たりなく感想を言うてくる。悔しいけれど、幸せそうに食べてくれるので、なんにも言わない。

美味しそうに食べられる人はたくさんいるけれど、幸せそうに食べられる人は多くないと社会人になってより痛感した。毎日の繰り返しの中、惰性の習慣を楽しめる鳴海がとても

羨ましい。本人は多分、気付いていないだろうけど。というか、鳴海にはこんなこと気付いてほしくない。

私の料理を褒めてくれて、幸せそうに食べてくれて、これ以上私はなにを求めているのだろう。

\*  
\*

暗い。樋口が暗い。樋口さんがお暗い。確実にやってしまったようだ。本人は隠しているつもりだろうけど、意外としっかり表情に出ている。樋口は多分、自分がそういうタイプだってことと気付いていない。俺はこの一か月で分かったのになあ。

って、そんなことよりも、かつてたくあんが原因で気まずくなった大人がいたか？ ああ、俺はただポリポリ触感が楽しくて食べてただけだよ、なんて言い訳を準備している暇はない。と  
いうか、それもバカみたいだし。考えるよりも行動。あのときを思い出せ。

「あのさ」

「……………なに？」

「俺、弁当の中で卵焼きが一番好き」

「……………うん、知ってる」